

Title	『静かなヴェロニカの誘惑』の「内側」と「外側」： 「合一」に関する時間と意味と意識の発生の現象学的考察
Sub Title	Die Innenseite und die Außenseite von Die Versuchung der stillen Veronika : Eine Betrachtung zur Genesis der Zeit, des Sinnes und des Bewußtseins in „Vereinigung"
Author	吉野, 泰斗(Yoshino, Taito)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2014
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.31 (2014. 3) ,p.77- 107
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20140331-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『静かなヴェロニカの誘惑』の「内側」と「外側」

——「合一」に関する時間と意味と意識の発生の現象学的考察

吉野泰斗

0. 序論

ローベルト・ムージルの短編小説『静かなヴェロニカの誘惑』（以下、『ヴェロニカ』）は、1906年に発表され成功を収めた『寄宿生テルレスの混乱』（以下、『テルレス』）に次いで、『愛の完成』とともに連作『合一』として1911年に発表された作品である。¹⁾『テルレス』が「言い表せないもの」を巡りながらも、舞台、事件、時間経過などに関しては比較的明確に描かれていたのに対して、『合一』、とりわけ『ヴェロニカ』にはほとんど物語の外的な進展ないしは筋らしい筋が見いだせない。このことが、難解な印象としてテキストに重くのしかかり、『テルレス』での成功から一転、批評家たちから不評を買う理由にもなった。そしてまた、ムージル自身に自作擁護と弁明のためのエッセイへと筆を執らせることにもなったのである。²⁾

-
- 1) 『テルレス』『ヴェロニカ』『愛の完成』からの引用は、Robert Musil: *Prosa und Stücke Kleine Prosa, Aphorismen Autographisches Essays und Reden Kritik*. In ders: *Gesammelte Werke* Bd. II. Hg. v. Adolf Frisè, Hamburg: Rowohlt Verlag, 1978. に拠る。以下では、同書からの引用はページ数のみを記す。
 - 2) その代表的なものとして、Robert Musil: *Profil eines Programms* (1912). In ders: *Prosa und Stücke Kleine Prosa, Aphorismen Autographisches Essays und Reden Kritik*. In ders: *Gesammelte Werke* Bd. II. Hg. v. Adolf Frisè, Hamburg: Rowohlt Verlag, 1978. S. 1315-1322. や Robert Musil: *Über Robert Musils Bücher* (1913). In ders: *Tagebücher, Aphorismen Essays und Reden*. In ders: *Gesammelte Werke in Einzelausgaben* Bd. II. Hg. v. Adolf Frisè, Hamburg: Rowohlt Verlag, 1955, S. 775-780. などが挙げられる。

それらのなかでムージルは、物語の因果的な叙述の拒否を表明している。「では私が、あの不思議な感情の諸連関の一つをこめるために物語が書かれなければならないと想定するならば、その物語も（その最深奥の本質にしたがって）因果的であってはならない。[...] というのも、外面的な出来事も心理学的な経過もそもそも運命の非人格的な部分にすぎないからだ（心理学は人格のうちの非個人的なものである）」³⁾。『愛の完成』では、夫との幸福な生活にある主人公クラウディネが旅先で偶然に出会った第三者である男に身を委ねることによって、また『ヴェロニカ』では、主人公ヴェロニカの相手男性ヨハネスの「死」を契機として、合一が成就するのだが、夫に対する不実もしくは相手男性からの隔たりが合一を成就させるという両作に共通にみられる逆説的な構造を、心理学的な描写はその事実的な感情の推移を事後的に追うことはできても、その本質において解明してはくれない。そこにはある感情と別の感情を、ある感情と出来事を「架橋」⁴⁾する本質的なものが欠けているのである。「心理学的に内面的なものでもって与えられるのは、人間に本質的なものの結果であるが、しかし本質的なものそのものではない」⁵⁾ と言うように純粋な感情も、また事実経過を捉える純粋な思惟的悟性も、各々無個性的なものとされる。本質連関の架橋が果たされる場は「感情と悟性の相互的な巻き込み合い」⁶⁾にあるが、この状態に至るためには、主観性の最内奥と客観的事実がそれぞれ追究される必要があり、すなわち無個性的なものが徹底されなければならない。そこにおいて初めて本質的なものが見出されるのであり、単なる因果論的な原因結果は本質的なものが展開するための口実にすぎないとされるのである。

『ヴェロニカ』において、心的にも事象的にも出来事の因果的な継起はおよそ断念され、そのことが物語の時間様相を錯綜としたものになっている。

3) Ibid., S. 1320.

4) Ibid., S. 1321.

5) Robert Musil: *Tagebücher, Aphorismen Essays und Reden*. In ders: *Gesammelte Werke in Einzelausgaben* Bd. II. Hg. v. Adolf Frisè, Hamburg: Rowohlt Verlag, 1955, S. 780. (以下、*Tagebücher* と略記)

6) Ibid., S. 779.

したがって『ヴェロニカ』の粗筋を順を追って並べることは、そこに表現されている事態をかえって因果的な時列に無理にはめ込むことにもなりかねないが、本稿の考察に関わる限りで予め確認しておきたいことは以下のことである。ヴェロニカはヨハネスと伯母、そしてデメーターという男とともに暮らしており、その暮らしは非常に閉鎖的で、物語のほとんどがヨハネスとの会話とヴェロニカの想起によって構成されている。まず、ヴェロニカとヨハネスはともに、ある「規定できないもの（das Unbestimmbare）」（195）を求めているのだが、彼はそれについて語りながらも今やそれを断念してしまったらしいことが語られる。それからヨハネスとの会話のなかでヴェロニカは唐突に、養鶏場で鶏を眺めていたときその鶏を正常に捉えることができなかったことを回想する。そしてその知覚の失敗には「言いようのないほど無関心な滑り落ち」（197）とも形容される、ある獣の表象が関係しているように思われる。そして獣の表象に悩まされるヴェロニカは、ヨハネスから一緒に家を出ることを提案されたとき、むしろ彼の死を願っていることを告げる。しかしその後、突然、長年求め続けてきたある重要な記憶がヴェロニカに現在の的に蘇る。そしてそれをきっかけにするかのように、ヨハネスが自殺行へと旅立つ別離の際にヴェロニカに合一への予感と思しき感覚の高まりが萌し、彼との別離が完了すると合一の陶醉が彼女を訪れるのである。

ヨハネスから離れることで合一が達成されるという逆説的な構造については、「恣意的なものが必然的なものをもたらす」⁷⁾ こと、すなわちヨハネスとの事実的な別離が二人の関係を本質的なものへ、合一へと昇華させることがしばしば指摘される。つまり事実から本質的な合一への移行ないしは転化が問題とされるのである。だが事実が自己同一的なものから成っているとすれば、事実から合一へと向かう必然性も自己同一的なもののうちに探られうる。したがって本稿では、事実と自己同一的なものの関係という観点から合一の境位について考察するが、その際、現象学が考察を先

7) Gerhart Baumann: *Robert Musil: Dichter der Vereinigungen*. In: *Robert Musil : Studien zu seinem Werk*. Hg. v. Karl Dinklage zusammen mit Elisabeth Albertsen und Karl Corino. Reinbek bei Hamburg: im Auftrage der Vereinigung Robert-Musil-Archiv Klagensfurt durch Rowohlt Verlag, 1970, S. 40-56, hier S. 46.

導する。現象学はまさに自己同一的なものについて議論しており、さらに合一を意味と時間と意識の関係から論じる可能性を与えてくれるだろう。⁸⁾ 自己同一的なものが溶解していく道を探ることで、合一がどのような仕方で達成され、成就した合一がどのような状態にあるのかに触れることができるはずである。

1. 現象学的な「意味」と時間

ムージルと同時代の 19-20 世紀転換期は、自然科学の分野では電磁気学、量子論、相対性理論などによる場の物理学が発展し、均質で客観的な時間・空間の連続性に懐疑の目を向け始めた時期であるが、哲学の分野では現象学、とりわけフッサールは時間を意識との相関において主題化した。

現象学の根本概念である志向性については一般に「意識はつねに何かについての意識である」⁹⁾と言われるが、これはつまり顕在的な意識はつねに対象の意味を相関者としてもつということである。だが感性的事物の知覚体験の特質には、どの瞬間の現出も一面的で非十全的な「射映」でしかなく、そのつど変化する現出の多様において、ある自己同一的な事物が与えられるということが属している。したがって知覚の意味統握は、多様な諸現出を連続的な内的時間意識において綜合統一し、その瞬間に顕在的に現前しているものを越えて「より多く思念すること」¹⁰⁾によって自己同一

8) ムージルがフランツ・ブレンターノの著作に親しんでおり、時間に関する考察に多くの示唆を受けていることが知られている。Vgl. Karl Heinz Bohrer: *Plötzlichkeit Zum Augenblick des ästhetischen Scheins*. Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1981. S. 205. また、フッサールの *Logische Untersuchungen* も 1900 年から第一巻が公刊され始めており、ムージル自身も 1906 年の日記にてフッサールについて触れている。Vgl. Robert Musil: *ibid.*, S. 103. ムージルとフッサールの思考型の親近性は頻繁に指摘されるところであるが、詳しくは vgl. Hartmut Cellbrot: *Die Bewegung des Sinnes. Zur Phänomenologie Robert Musils im Hinblick auf Edmund Husserl*. In: *Musil-Studien*. Bd. 17. München: Wilhelm Fink Verlag, 1988.

9) Vgl. Edmund Husserl: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. In ders: *Husserliana*. Bd. III/1. Haag: Martinus Nijhoff Verlag, 1950. S. 212f. (以下、*Ideen I* と略記)

的な対象を構成するのである。顕在的に現前している側面が、つねに潜在的な側面を伴うことをフッサールは「地平 (Horizont)」と呼んだが、「何かについての意識」の「何か」とは、そのつどの個々の現出を超えた、非顕在的な地平を含めた対象まるごとの「意味 (Sinn)」、全体志向であることが理解される。しかし、だとすれば潜在的地平もまったくの無規定性において志向されているのではなく、何らかの規定性をもっていることになる。「潜在性は空虚な可能性ではなく、内容的に、しかもそのつどの顕在的な経験自体のうちで、予描された可能性であり」¹¹⁾、「予描自体はたしかにいつでも不完全であるが、しかしその未規定性においてやはり規定性のある構造をもっている」¹²⁾ のである。

感性的事物の一連の知覚において、その流れゆく射映現出は多様な可能性にありながらも無秩序ではなく、身体の動きに制約されて「動機づけられた順序で進行する」¹³⁾。この連関はまさに次の瞬間に来たらんとする現出を予料させるものであるがしかし、その予料はすでに対象が全体として志向されていることを前提としている。フッサールは「アスペクトはそれ自身としてはなにもものでもなく、ただ現出と分離不可能な志向的な地平によって、アスペクトは～についての現出なのである」¹⁴⁾ とする。つまり、射映という形での現出は、潜在的側面を含めた丸ごとの対象全体から、当の対象の一側面であるという意味を汲んでいるのである。事後的に反省すれば、対象の現出にはその感性的素材をなす「ヒュレー (Hyle)」¹⁵⁾ が見

10) Edmund Husserl: *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*. In ders: *Husserliana*. Bd. I. Haag: Martinus Nijhoff Verlag, 1950. S. 91. (以下、CMと略記)

11) Ibid., S. 81f.

12) Ibid., S. 83.

13) Edmund Husserl: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. In ders: *Husserliana*. Bd. IV. Haag: Martinus Nijhoff Verlag, 1952, S. 58. (以下、*Ideen II*と略記)

14) Edmund Husserl: *Analysen zur passiven Synthesis*. In ders: *Husserliana*. Bd. XI. Haag: Martinus Nijhoff Verlag, 1966, S. 6. (以下、*Analysen zur passiven Synthesis*と略記)

15) Vgl. Edmund Husserl: *Ideen I*, S.171f. ヒュレーは「感覚的ヒュレーすなわち素

いだされ、意識がヒュレーに意味付与（Sinngebung）することによって、「～の現出」という対象的意味の志向的体験が成立するとされるが、この意味付与はヒュレーに対して一義的なのではない。個々の現出がもつ意味は、個々の現出にもともと帰属していたものではなく、つねに特定の文脈に置かれることで初めて生じるのである。

この全体志向を可能にするのは、対象を予め親しまれたものとして、潜在的な地平を馴染みある地平によって予描する「類型的既知性（typische Vorbekanntheit）」¹⁶⁾である。新たな対象についての経験は既在の経験連関を参照し、それとの差異としてなんらかの「意味」を得ているのである。また同時に、新たな対象は経験連関に組み込まれ、新たな意味が経験連関を組み換えることによって、後続して経験される対象的意味の構成に参加することになる。したがって「経験の個別的对象についての認識活動は決して、あたかもその対象がまったくまだ規定されていない基体として最初に与えられるかのように、なされるのではない。世界はいつもすでに、そのなかで予め認識が様々な仕方て仕事を果たしたものとして、我々にとってある」¹⁷⁾のである。このようにして、ある現出が与えられたときにはいつも、それに続く次の瞬間の現出が予料され、新たな部分志向がなされることになるのだが、予料と「今」の現出におけるそれぞれの部分志向は、同じ全体志向から導かれるものであり、両者の志向は切り離しがたく協働しているため、まさに来たらんとするものの予料は「未来予持（Protention）」として、純粋な「今」は「原印象（Urimpression）」として同じ「現在（Gegenwart）」の位相に属する。

だが、対象が自己同一的なものであるためには（そもそも自己同一的なものでなければ対象にもなりえないが）、経験の進行において部分志向が

材」とも呼ばれ、フッサールでは感覚与件とほぼ同義語として用いられる。*Ideen I*ではヒュレーはまだ「それ自身のうちに寸毫も志向性を持たない感覚的なもの」とされ、ノエシスによる意味づけを待つだけの消極的な役割としてしか捉えられていなかった。

16) Edmund Husserl: *Erfahrung und Urteil*. Hamburg: Claassen Verlag, 1954. S. 26.
（以下、*EU*と略記）

17) Ibid.

次々に充実され、連続する諸現出が先行する諸現出に調和的に合致しているということが、意識において保持されていなければならない。それゆえ、まさに今過ぎ去ったものを現在の位相に保持する「過去把持 (Retention)」の意識が必要となる。ところでフッサールが意識現象を「ヘラクレイトス的な流れ」¹⁸⁾と形容したように、意識の「今」においては多様な印象が一瞬もとどまることなく絶えず現れては流れ去ってゆくが、次々に流れ去るものをただ失われるに任せていては、「何か」つまり「自己同一的なもの」も、意識が意味対象と相関的である限りで経験すらも成り立たない。¹⁹⁾したがって、多様な流れ去るものを取り集め、意識に何が与えられたのかを再認できるということが、自己同一的なものおよび意識体験の条件となっているのである。だが先に述べたとおり、意識現象は絶え間ない流れ去りなのであり、どの「今」もこれを名指した瞬間にはもうすでに「たった今」へと移り変わってしまっている。この意味で、対象化される「今」はつねに後追性 (Nachträglichkeit) においてしか捉えられない。それゆえ純粋な「今」を捕まえることはできないのだが、言い換えれば、「今」はつねに「今」でなくなることと不可分であり、失われるという脱現在化においてそれが存在したことを証す、不在における現前という事態が考えられる。そして「経験」とは本質必然的に完了の相のもとで初めて成り立つ事態なのであり、自己同一的なものは自らを失うという形で初めて再認されるものとなるのである。したがって、たった今過ぎ去ったものも「現在」の位相に属し、「過去把持」と「原印象」と「未来予持」が三位一体的に幅をもった「現在」を形成することになる。

このように自己同一的な対象は時間的に構成されるのであるが、言い換えればこの構成には、動機づけのために先行する諸現出を意識に取り集め、動機づけられた可能な諸現出を予料する主観性が、すなわち連続する諸現出のなかで一貫して対象の意味を妥当し続ける自己同一的な自我が必要なのである。それゆえ意識の連続性が要請されているのであるが、自我の自

18) Edmund Husserl: CM, S. 86.

19) 以下の「不在における現前」の議論については、斎藤慶典『フッサール 起源への哲学』、講談社、2002、138 - 160 頁参照。

己同一性を支える過去把持と未来予持の連なりも、互いに調和的に合致しながら進行する諸現出によって初めて可能になることを忘れてはならない。極端な想定をすれば、仮に諸現出が混沌としていかなる意味も現れないならば、対象的意味の再認可能性がないことになり、それと並行して意識も反省可能性を失うからである。したがって自己同一的な対象と自我とは必然的に同時に成立するのである。

以上、フッサールの論に沿って、意味がつねに時間的事であること、また純粋な「今」は捉えられず、現在が流れという幅をもっていることが確認されたが、『ヴェロニカ』では純粋な「今」性を奪い去られたはずの過去が、その時間の隔たりにもかかわらず事後的・反省的な解明を拒み、根源的な「今」と合致する奇妙な時間構造がみられる。次節は、過去と未来が抹消されるこの瞬間が予感される合一においてどのような意義をもつのかを考察する。

2. 合一の予感と、概念と可能性感覚

ヴェロニカは、それが何なのかわからないまま、しかしそれが存在することは確かに感じ取られる、ある記憶を求めている。その記憶は、ヴェロニカがヨハネスの求婚を拒絶し、彼の死を願う言葉を告げたあと呼び覚まされる。「彼女が今、突然 (plötzlich) にすべてを再び見分けた、まさにこの奇妙に熱い驚き」(206)であるその記憶は、「一度に (mit einemmal) 多くの年月を飛び越して再びそこにあった」(204)。この箇所できりわけ頻出する „plötzlich“ や „mit einemmal“ という語は、『合一』の特異な時間様相(また空間様相)を特徴づける、非常な質量を担った表現のひとつである。ヴェロニカがここで体験した記憶は、「ようやく後になってから (nachträglich) ある想起 (Erinnerung) だったことに気づいた」(204)のだが、想起である限り直線的な時間の過去に位置するはずのものであるにもかかわらず、「予期せず、熱く生きいきと (heiß und lebendig)」(204)現在的に呼び覚まされているのである。この記憶は一頭のバーナード犬に関する印象なのであるが、彼女がとくに愛したその胸部の毛皮は彼女には自然の景観のように思われる。そしてそれは、「目をじっとひとつの場所だけに向けていると、その視線がもつれてしまうほどに見渡せない豊かさ」と果

てしなさ」(204)で人間による明確な分節を拒むのである。さらに自然の景観は「巨人」(205)を思わせ、その中で山や谷、森などとともに鳥が揺れ動き、鳥には風が棲みついている。あたかもこの自然は、入れ子式の微視の階梯をなしているようであり、自然は最小単位を区切ることができない動的な生命力で迫ってくるのだが、同時に「すべてがただ強力に権力と秩序によって威されているように静止していると思われるほど、次々に連なり合い、あるものが別のものに押し付けられている」(205)ヒエラルキーを形成している。しかし、静的に形成された秩序も巨人の怒りによって再び生成の動きへ転じるのである。このように人間の象徴的な概念に還元されない、生成的な自然の表象はまた「庭」の表象とも通じている。

……ああ、庭は……私はときどき夏の真っただなかに、雪の中に横になつたらこうに違いなんて考えたの。こんなに慰めなく心地よい、地面がなく暖かさと冷たさの間で漂って、跳び上がりたいけど、甘い滲みのなかへ弛緩してしまう。あなたは庭のことを考えて、この空虚な絶え間ない美しさを感じないかしら。きっと光、鈍い過剰の光、言葉を失わせる光、意味もなく肌を和らげて、樹皮の呻きと擦れ、そして葉の止むことのない静かなざわめき……あなたには、この庭で私たちのもとで終わる生の美しさが、まるで何か平らかなもの、踏み入るなら沈んでしまうだろう海のように閉じ込めて遮断する、思い切り果てしないもののようにではないかしら……。 (200)

ヴェロニカが語るこの庭の表象には、雪や光、さらには声を発する植物と、生成する自然の浸透がみられるが、直接的に「言葉を失わせる (wortlos machend)」や「無意味な (sinnlos)」といった否定的な言葉で、この庭の表象には概念の秩序が入り込む余地のないことが告げられている。だがここで際立っているのは、ヴェロニカの描写に、対立する概念が次々と使用されていることである。先述のバーナード犬にまつわる自然においても、ヒエラルキーの静的な秩序と、そのヒエラルキー自身の無限の入れ子構造や巨人による秩序の動転という対立し合う描写が見られたが、こちらはより顕著である。したがって、ここでは互いに排除し合う概念と、概念によ

って「規定できないもの」が同時に問題となる。

ところでムージルも、「予め形成された安定した諸表象なしでは、その諸表象が概念なのだが、本来、混沌しか残らない」²⁰⁾として、経験の成立には概念が必要となることを認めている。つまり、さまざまな印象も何らかの対象との関係を参照しなければ区別されず、人は対象を類型的に、すなわち概念による合理化という助けを借りて知覚するということである。さらにムージルは、複雑な感覚的印象が明確な概念の内容へと合理化されるプロセスを、ゲシュタルト的な定式形成によって説明する。²¹⁾ 身体運動から言語活動、あるいは視覚、聴覚などの単純な知覚経験にいたるまで、あらゆる素材はゲシュタルト的に定式化されており、複雑な素材を単純化し整えるこの定式化は、精神にとって経済的であり、「生きることを楽にしてくれる」²²⁾のである。このような合理的思考はしかし、「見込みに応じて表象の経過に添え木して、それを一義的で逸脱不可能なものにする」²³⁾ことをも意味している。概念が合理化、定式化によって習慣の硬直した連関に動かしがたく収まるにつれ、その不断の変化と運動にもかかわらず、個体 (Individuum) の同一性 (Identität) といういわば習慣の錯覚が引き起こされる。しかも、経験される事物の同一性は、対象と意識が相関的である限りで、経験の主体である自我の同一性をも保証するので、時間の経過に一貫した経験的自我という観念を作り出すのである。

20) Robert Musil: *ibid.*, S. 675.

21) ムージルの多数の著作にゲシュタルト理論の影響を読み取ることができる。ヴェルトハイマー、ケーラー、コフカらに代表されるゲシュタルト心理学は、所与の全体特性はそれを構成する部分要素の総和に還元されえないことを基本テーゼとして、心的現象がより形態的に優れ、より秩序ある、簡潔なまとまりへとさまざまに体制化されることを説いた。ムージルは、少なくとも1911年以前にエーレンフェルスの「ゲシュタルト質 (Gestaltqualitäten)」の理論に親しんでいる。ムージルとゲシュタルト心理学の関係は Vgl. Silvia Bonacchi: *Die Gestalt der Dichtung: der Einfluss der Gestalttheorie auf das Werk Robert Musils*. In: *Musiliana* Bd. 4., Hg. v. Marie-Louise Roth, Bern, Berlin usw.: Peter Lang Verlag, 1998.

22) Robert Musil: *ibid.*, S. 714.

23) *Ibid.*, S. 707.

また、ムージルは芸術の課題を論じるなかで「経験（Erfahrung）」と「体験（Erlebnis）」を峻別している。「芸術作品は経験となる傾向を総じてもっていない。芸術作品はある別の次元へと広がっていくのである。自身をその瞬間、音楽に捧げている踊り手や聴き手、観る者、心打たれている者は、あらゆるそれ以前とそれ以後から解かれている。[...] その者は体験を自身のうちに受け取るのではなく、体験のうちに没入している。そして、まさにこの別の振る舞いこそ、しばしば専有的な強調でもって『体験』と呼ばれているのである」²⁴⁾。つまり「体験」は時間の流れのなかで意味を規定する経験の一義性から離れ、その一回性と瞬間性においてまさに定着できない直接的な状態性として考えられている。²⁵⁾ したがって、体験のさなかにあって、つねに純粋な「今」の様態において作動しつつある純粋な自我と、「摩擦のない自明的な習慣の現存在」²⁶⁾ではあるが、時間的な総合による産物である経験的自我とは、合致しない。そして経験的自我の習慣的な日常の単調さは、純粋な自我の体験の予感を薄弱にしていく。「日々は他の日と同じように過ぎ去り、年々は他の年と同様にやって来た。彼女はおそらくまだ、どの年も少しのものを取り去り、あるものを付け加えること、自身がゆっくりとそのなかで変わっていくことを感じた。しかし、どこにも他のものから明確に目立つものはなかった。彼女は自分自身について不明確な、流れるような感じをもった。そして内側から自身に触れたとき、その意味を察知することなく覆いの下で何かが動いているのを感じるように、おおよその包み隠された形の交代だけがわかった」(207)。

絶え間ない変化のなかで、そのつどの純粋な「今」の様態における自我が、自己を失うことで、互いに結びついた全体としての自我という自己同一性を得ることが可能になる。ヨハネスは自身のなかにある「捉えられないもの」を捉えようとして、それを神と呼んでみると、それは「無効にな

24) Ibid., S. 680.

25) ムージルは「体験」を定義した上で、芸術の任務とは「芸術が経験の定式を体験によって粉碎することで、世界の内での振る舞いと世界像の、止むことのない改変と更新をすること」であるとしている。Vgl. ibid., S. 681.

26) Gerhart Baumann: a.a.O., S. 42.

った概念であり、彼が言おうとしていたことについて何も言っていないかった」(195)。そして「彼が言おうとしたことは、おそらくまだ存在していない何かから理解しがたく由来したものであった」(195)。習慣化して硬直した概念は、「規定できないもの」がもつ豊饒な可能性の合理化であり簡素化である。事実が成り立つことと何かを失う経験は不可分であり、事実是不在からその意味と効力を得ているのだとすれば、事実を不在がもつ可能的なものより優先させる理由はないことになる。²⁷⁾ したがって「もしかすると別様でもありえただろう」²⁸⁾ ことを現実と同等に扱うことが求められるが、それが後に「可能性感覚 (Möglichkeitssinn)」²⁹⁾ と明確に定義されるものである。ヴェロニカは「人が互いにありうるだろうものについてはっきりしない表象」(201) を、成り立っている現実とは異なる関係思い描き、「ある世界、脇へ逸れたあるもの、別の世界」(220) に憧れているが、『ヴェロニカ』においてすでに可能性感覚というテーゼは色濃く打ち出されている。

可能性感覚において「起こらなかったことが起こったことと対等に仲間になる」³⁰⁾ のであれば、すなわち可能性が現実と同等の資格を有するのであれば、現実には「可能な現実 (mögliche Wirklichkeit)」として、可能性は「現実的な可能性 (wirkliche Möglichkeit)」として捉えなおされなければならない。そのとき、ある語において述べられなかったことが、その存在を

27) ムージルは、現実がいかに多くの仮定的要素で成り立っていることを指摘する。現実への懐疑は、およそ最高度に客観性を実現していると思われる、自然科学の成果にも向けられる。Vgl. Robert Musil: *Tagebücher*, S.782 「合理的な領域は固定的なものと考えには入ってこない誤差の概念によって支配されている。事物のなかにその根拠を有するとする虚構としての固定的なものの概念によって。最も深いところでここでも地盤は揺らいでいる。数学の最も深い基礎は論理的に確かめられておらず、物理の法則は近似的にのみ通用するだけである」

28) Robert Musil: *Der Mann ohne Eigenschaften*. In ders: *Gesammelte Werke* Bd. I. Hg. v. Adolf Frisé, Hamburg: Rowohlt Verlag, 1978. S. 16.

29) Ibid. 「可能性感覚は、同様にありうるかもしれないすべてを考える能力、存在するものを存在していないものより重要視しない能力と定義されうる」

30) Gerhart Baumann: a.a.O., S. 45.

要求してくる。つまり「その沈黙は、[...] 一度に (mit einem Male)、現実的なものとして、生きたものとして扱われることを要求」(63f.) するのである。例えば「近いこと (Nähe)」すなわち「遠くないこと (Nicht-Ferne)」と、「遠いこと (Ferne)」すなわち「近くないこと (Nicht-Nähe)」、反対の概念である両者が実は、数値によっては把握されえないある相対関係にあるのならば、近いことは「可能な遠さ (mögliche Ferne)」でもあり、遠いことは「可能な近さ (mögliche Nähe)」でもある。ムージルにおいては、互いに排除し合い、截然と隔たってみえる反対のものが、「分かれてもなく、一致するのでもないもの (Die Ungetrennten und Nichtvereinten)」³¹⁾ であり、互いに補完し合う関係にあるのである。³²⁾ ムージルが『合一』について、「[...] (最も小さな歩幅で歩く道を) 最も細かく漸次的な、感知できないほどの移行の道をとる決心がされた。それは倫理的な価値をもつ。つまり、あるものからその反対への恒常的な移行をもつ倫理的なスペクトルの表明である」³³⁾ と自解しているように、『ヴェロニカ』においても両立されないように思われる反対どうしの概念は、その沈黙のうちに潜む可能的性格によって、到達されるべき合一の状態においては連続的に移行し合えるものとなる。

したがって、ヴェロニカの自然と庭についての表象における対立する概念も、互いに隔絶したものとしてあるのではなく、生成的に移行し合う状態にあるのである。そして過去と未来という対立もその例外ではない。過去から由来する „noch“ よりも、その過去から現在の間で変化があったことを表す „nicht mehr“ は「今」へと接近する。同じく、未来から由来する

31) Robert Musil: *ibid.*, S. 1104.

32) Vgl. Jürgen Schröder: *Am Grenzwert der Sprache zu Robert Musils „Vereinigungen“*. In: *Robert Musil*. Hg. v. Renate von Hezdebrand, Bd. 588: *Wege der Forschung*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft. S. 380-411, hier S. 383ff.

33) Robert Musil: *Tagebücher*, S. 811f. auch vgl. S. 634. 「すべての、あれか—これか (Entweder-Order) のなかにはなんらかの素朴さがある。いかにその素朴さが価値を測る人間に似つかわしくても、しかし思考する人間には、対立するものどうしが移行の連続のなかに解消される人間には、似つかわしくない」

„schon“よりも、現在からその未来までの間で変化することを表す „noch nicht“は「今」へと接近する。それゆえ過去を主な範囲とする „noch”と未来を主な範囲とする „schon“の間の限界は、„nicht mehr“と „noch nicht“の間にあることになる。³⁴⁾ まさしくそこに純粋な「今」も位置していると考えられるのだが、„plötzlich“(またそれに準ずる „mit einmal“)という情勢が切り開く次元も、凝固した概念を作り出す単線的な時間の延長のなかにない限りで、そこに位置するのである。合一が、ヴェロニカとヨハネスの関係を、単に事実的で偶然的なものから、どんな事実によっても奪い去られない本質的なものへと昇華させることであるとするならば、その合一は事実を去っているという意味で、やはり客観的な時間のなかに延長をもつわけにはいかなくなる。そして „plötzlich“な自然の表象が、事実的決定を拒否するという点においても両者は同じ次元を開いており、そのとき自然の表象は合一への予感となるのである。

しかし „plötzlich“な瞬間が切り開く次元、すなわち予感される合一が、その一回性と瞬間性において定着できない純粋な状態性にある「体験」であるならば、あらゆる過去や未来から断絶していることになり、いかなる自己同一的なものももたない混沌の絶え間ない流れ去りであるように思われる。それゆえ自然の表象も、非概念的で „utopisch“な側面を一方に、「点的な瞬間に滴り落ちる忘却 (das punktförmig- Augenblicks hinabtropfende Vergessen)」(215)である「獣 (Tier)」としての側面を他方にもつのである。最初にこの獣の表象が登場するのはヴェロニカが語る回想の箇所だが、その回想のなかで窓辺から眺めていた養鶏場の鶏について、「『それは繰り返し、獣のこの言い表せないほど無関心な滑り落ちだった』と彼女は言った。彼女が目の当たりにしたものを彼女は今日でもなお、ごく単純に自身の前を行くのだが、まったく把握されえないあるもののように見るというのだ」(197)と述べられる。いかなる自己同一的なものも形成しない流れ去りは、対象化する把握の目を許さない。さらにヴェロニカが獣について感じたこの印象は、はじめデメーターに適用され、彼は「恐ろしい広大な空虚のなかで暮らしている」(197)と形容される。回想はさらにヨハネス

34) 時間の極限值について、vgl. Jürgen Schröder: a.a.O., S. 386.

がデメーターに殴られたとき、ヨハネスが怒りを感じたにもかかわらず微笑んだ場面に移り、その後ヨハネスは僧侶になることをヴェロニカに告げたとされるのだが、そのとき彼女はヨハネスこそが獣だと感じたのである。ここで、ヴェロニカのなかで「ほかの人がそこに自身をもっているところに、この空虚さ」(198) しかもたないという点で、獣と僧侶は奇妙に重なり合っている。しかし前者は衝動のみに生きる者であり、後者は「いわば文化の最高段階に達している完全な衝動の抑圧」³⁵⁾を遂行する者であるので、両者は互いに反対するもののように思われる。

獣がつねに幅のない点的(punktförmig)な「今」にとどまるならば、どんな「体験」をしようとも、その反省可能性をもたないことになる。逆に僧侶は、反省可能性をもつ。しかし、ヨハネスが僧侶になることを意志した理由をヴェロニカが「そうすれば、あなたは私に対して男ではなくなるから」(199)としているのを一例に、僧侶があらゆる関心を脱した者であるとすれば、いかなる「体験」ももたないことになり、反省する中身を欠くことになる。したがって両者はともに経験的な自我を形成せず、また純粋な自我をもっていたとしてもそれは対象化不可能であるため、結局、自我は空虚にならざるをえないのである。したがって当時のヨハネスは、「非人格的(unpersönlich)」(199)な空虚さ、自我をもたない特性のなさにおいて、反対概念である獣と僧侶を渡る者なのであるが、その特性のなさは、ここまでの考察では差し当たりまだ絶え間ない流れ去り以上の積極的な意義を得ていない「規定できないもの」でしかない。

3. 点的な流れ去りと先意味的な次元

しかしまたヴェロニカ自身も獣の側面をもっているため、彼女は絶えず点的な流れ去りに悩まされている。「彼女の生の速度はまるきりゆっくり

35) Gerhard Meisel: *Transplantation und Metamorphose. Das Motiv der Haut bei Musil und Kafka*. In: *Genauigkeit und Seele : zur österreichischen Literatur seit dem Fin de siècle / Internationale Robert-Musil-Sommerseminare 1987 und 1988 im Musil Haus, Klagenfurt*. Hg. v. Josef Strutz und Endre Kiss, Bd. 18: *Musil-Studien*. München: Fink, 1990. S. 171-190. hier S. 180.

だった。あのころは、それはもはやゆっくり目を開け、再び閉じるようなものでしかなく、その間に眼差しは物を捕まえることができず、滑り落ち、ゆっくりと手つかずに滑り落ちるようだった」(207)。それゆえヴェロニカに予感される合一においてやがて成就されるべき何らかの際立ちは、一義的に縮減されえないという意味で時間のなかで経験的な事実性として形を得ることもできないが、かといって、いかなる未来や過去からも切り離されてしまえば、点的で純粋な「今」による流れ去りに陥ってしまうという非常に危うく不安定な状態にあることになる。合一をかすかに垣間見させる „plötzlich“な瞬間は、決して単なる空虚や無ではないが、合一における特別な際立ちをはっきりした輪郭へと描くこともできない。

これまで暗い霧のように彼女の生の上にのしかかっていた不透明なものが、突然 (plötzlich) 動き出し、それが彼女には、長いこと探していた対象の形がまるでボールのなかで押し跡をつけて、再び消えていくかのように思われた。そしてたしかに何ものもまだ (nichts noch)、指で捉えることができるほどその容貌を際立たせることなく、すべてはなおも (noch) 静かに手探りする言葉たちのあいだで逃れて、何についても言うことができなかったが、しかしそれは、いまもはや言われなかった (nicht mehr gesagt wurde) すべての言葉であり、すでに (schon) はるかな眺望によってのように遠くから見られ、日常的な行為を舞台の上へ一緒に押し集め、地面の平らな砂利の綾のなかでいつもは見えない道の徴へと積み上げる、あの奇妙に共に振れる理解に伴われたすべての言葉だった。その不透明なものが、まるきり薄い絹の仮面のように、明るく、銀灰色に世界を覆い、はち切れんばかりに動いている。(211)

ここでは「不透明なもの」、「ボール」、「砂利」、「仮面」などが、際立ちが輪郭をとることを阻害しているが、このような「覆い (Decke)」は何度も言い換えられ、阻害された輪郭は「暗い染み」(201) や、ヴェロニカ自身の顔の線が「こちらでは細くなり、そちらでは太くなった」(202) として彼女につねに付きまとうのである。対象としての明確な輪郭をとることは

ないが単なる無でもない、この覆いの下のは、未だ意味に至らない先意味的なものであるとみることができる。

そこで先意味的なものの存在身分が問われるが、自己同一的な自我と「意味」は、時間的に構成されたものであるとすれば、そもそもそれらを構成する先行段階が探られうる。したがって時間のなかで能動的に統握される以前の対象、対象性の萌芽段階すなわち「ヒュレー的な諸対象」³⁶⁾が注目されることになる。自我が未来予持、原印象、過去把持の連続的な時間のなかで諸現出をとりまとめる中心化の機能を果たすには、そもそも諸印象（感覚与件）が何らかの仕方で自我に対して際立ってこなければならぬ。しかしこの感覚与件の際立ちは、もはや自我の能動的な志向作用とは言えず、自我の受動的な志向性、むしろ感覚与件の側からの、すなわち自然の側からの「触発（Affektion）」という自我への働きかけと解される。

意識が能動的に対象を構成する注視を振り向ける以前の受動性の領野は、そこから対象が顕在的な際立ちにおいて、意味の明確な分節として他から截然と分離されてくることになる、ある「場（Feld）」³⁷⁾であり、能動的な意識はまったくの無から対象の意味を一時に創造するわけではない。「自我的な能動性が何らかの意味付与的な能作をまだ行使する前には、本来の意味ではまだそれは対象性の場ではない」³⁸⁾がしかし、「この場は単なる混沌や、『所与』の単なる『ごった返し』ではなく、一定の構造、成形や分節される個性の場であり」³⁹⁾、「あらゆるそのような感覚の場は、それ自身統一的であり、同質性の統一体である」⁴⁰⁾。つまり受動性の領野は、自我の能動的な注視以前にすでに構造化されているのだが、その構造化をなすのは「類似しているものが類似しているものによって喚起され、類似していないものと対照をなす」⁴¹⁾という「同質性・親近性」と「異質性・異他性」の原理である「連合（Assoziation）」である。⁴²⁾ これによっ

36) Edmund Husserl: *Analysen zur passiven Synthesis*, S. 164.

37) Edmund Husserl: *EU*, S. 74.

38) *Ibid.*, S. 75.

39) *Ibid.*

40) *Ibid.*, S. 76.

41) *Ibid.*, S. 79.

て統握される以前の場のなかで、ヒュレーが類似するヒュレーとともに最低限の統一をなして、異質的なものとの対照からゲシュタルトのように浮かび上がってくるのである。そして、場から発生するこの曖昧なまとまりが対象の萌芽の段階であり、それが一定の際立ちをもつことで自我は触発され、能動的な意識作用の段階へ移行する。したがって、この諸与件の類似と対照が織りなす綾は、未だ対象には至らないが、先意味的なものをもった意味の根源的形態であるといえよう。さらにさまざまな連合を、すなわち類似性と異他性を経ることによって、次第に明確に分節された意味が発生してくることになる。こうして静態的に思われた意味付与作用の拠り所であった類型が、そもそもこの意味発生の受動性の現場から獲得されていたことが理解される。またこの意味発生の現場は、ムージルが「予め形成された安定した諸表象」もしくは「定式性」と呼び、習慣化されてしまえば「体験」を一義的に縮減するものとして働く概念が未だ凝固していない、生成の次元を示している。完成されたゲシュタルトではなく、そのゲシュタルトの生成の場面が主題なのである。

ところで先意味的な段階は、過去把持－原印象－未来予持という内的時間意識が形成される以前が舞台であったがしかし、意味の綾をなす感覚与件は端的に即自的に、ないしは点的な瞬間においても存在すると考えられるだろうか。極端な例を挙げれば、視野一面を覆う均質な色のスクリーンなどを前にして自身が静止している場合、やがてスクリーンは色味を失って視野の感覚はなくなるだろう。また、ガラスの平面に手が触れているとして、その接触が圧も変わらずに永久に一切動かず変化しなかった場合、身体はガラスに触れているという感覚をもつことはないだろう。フッサールは「どの新たな刺激も第一に感覚を引き起こすのではなく、感覚野のなかでそれに対応する感覚の変化を引き起こす」⁴²⁾と述べている。つまり、感覚的な際立ちがまずあるのではなく、第一に変化ないし運動が先行するのである。したがって何らかの変化があり、そこに生じる類似と異他の対照の両項として、今の瞬間の感覚的な際立ちと、その前の瞬間の際立ちが

42) Vgl. *ibid.*, S. 78.

43) Edmund Husserl: *Ideen II*, S. 155.

それぞれ成立する。各瞬間ごとに一定の内容をもった端的な原印象が「まずあり、それからそれらの綜合が生じるのではなく」⁴⁴⁾、連合が生じることで継起としての二つの感覚的な際立ちが形成されるのである。⁴⁵⁾ また、過去把持—原印象—未来予持という「時間構成が達成するものは、継起の普遍的な秩序形式とあらゆる内在的所与の共在形式でしかない。しかし、内容なしの形式は何ものでもない」⁴⁶⁾ のであり、それゆえ時間の発生は、類似と対照の綾としての意味の発生と共時的であると考えられるのである。

そうであるならば、ヴェロニカがつねに抱き続ける、輪郭をとることは無いが無でもないものは、意味と時間が発生しようとするその趨勢、何かが動き始めつつあるが未だ動き出していないその動静の間に、一瞬、定着することなく合一への予感として感じられ、合一が成就されるなら通常の状態とは別の仕方では際立つはずのものである。ヨハネスが「あの捉えられないもの」を現実にもたらそうとして神と呼んだものを、ヴェロニカは「いわば向けられるもののない何らかの方向、いわば動くもののない運動、あなたのなかで現実の生にまで高まることのない幻」(196) と形容している。

ここまでヴェロニカの記憶と知覚の失敗から、予感される合一が切り開く次元の性格を考察してきたが、とはいえ合一は飽くまでも他なるものとの合一であり、推定上は差し当たりヨハネスとの合一であるからには、二人の関係に目を向ける必要がある。かつてヴェロニカには、ヨハネスが合一を体現しているように思われたことがある。そのとき「あたかもヨハネスは世界を吸い込み、身体のにかに捕えて内側から感じるができるかのよう」(208) であった。このような内側からの感じ取り、混ざり合いの

44) Edmund Husserl: *Analysen zur passiven Synthesis*, S. 398.

45) 高野孝「意味と時間——フッサールにおける知覚的意味の発生」、日本現象学会編、『現象学年報』18号、2002年、157－165頁参照。とくにここでは163頁。高野氏はオーケストラの演奏の例によって、場所的秩序（共在）と時間的秩序（継起）における連合を巧みに説明している。「ピアノの音位相の原印象は、他の楽器の音位相の原印象との間で類似と対照を成し、音色の点で過去把持と融合しつつ、音の高低や強弱等の点で過去把持に対し際立つのである」。

46) Edmund Husserl: *EU*, S. 76.

表象が徐々にヴェロニカをも合一の状態へとせり上げていくのだが、今度は現実のヨハネスの存在が合一を妨げる。というのも、今やヨハネスはデメーターに殴られたにもかかわらず微笑み、僧侶であり、かつ獣でもある彼ではなく、「あの捉えられないもの」を神や事物といった概念に硬直させようとし、さらにはヴェロニカが求める合一を婚姻契約という事実で置き換えようとする、事実的な現実生きる彼だからである。ヨハネスが事実的な現実には逃れると、経験的な他者としてのヨハネスは、ヴェロニカに外からの規定を与え被せ、事実的な現実には位置づけようとする他者の目として働く。

事物知覚において予料された潜在的地平は、現出を変化させれば順次詳細に規定されていくはずの地平である。だが他我の存在は、その地平をすでに今において規定する視点として働き、事物に「客観的」という性格を与える。したがって他我は同時多視点性としての役割をもつが、「私にとって」の妥当が「順次」という性格を持っていたのに対して、「我々にとって」の妥当は「過ぎ去った未来」⁴⁷⁾ ないし「未来完了」⁴⁸⁾ という性格をもっているのである。そして一般に鏡像段階論が示すように、統一的な全体性をまだもっていない未発達な自我の身体は、自己の全体像を原理的に見ることはできず、欲望された鏡像ないしは他者の像を、自身と同一視する。こうして、自我は自身の身体について自己同一性を獲得することによって自己を個体化するのだが、これは他者と自己との裁断でもある。しかしこの同一視では、そもそも未来を先取りして理想化ないしは客体化された体が手本となっており、⁴⁹⁾ それゆえ理想化に先んじてつねに能作しつつある身体と客体化される身体との差異が見過ごされる。したがって「他者との同一視による自我の自己陶酔的な承認というずらされた様態は、自我はいつもすでに自分自身のもとにはいないということを示している」⁵⁰⁾。

47) Georg Christoph Tholen: *Die Zäsur der Medien. Kulturphilosophische Konturen*. Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2002. S. 75.

48) Ibid.

49) 鏡像段階論について vgl. *ibid.*, S. 74ff.

50) Ibid., S. 84.

経験的な他者として他者を客体化することは、同時に、自身が他者から見られるものであることを学ぶことであり、その意味で自身を対外的な表象として客体化し始めることを意味するが、しかし自己の理想化された対外的な表象すなわち見られるものとしての自己は、現在が未来を先取りした現在によって分裂させられたように、見るものとしての自己と完全に重なり合うことはない。

したがって、経験的な他者としてのヨハネスの居合わせは、自己と他者を分離するだけではなく、自身についての感覚にも自己と重なり合わないもどかしさを生じさせる。こうした自己との不一致には、現実のヨハネスから離れ、自己の感覚に浸ることが対抗している。とりわけ身体感覚を保つためには、その再帰的感覚において身体の局所づけの役割を果たす触覚や肌が重要な契機となるが、ヨハネスとの別離に際して、ヴェロニカの肌の感覚は非常に繊細である。さらに「彼女は突然再び自身に沈み入り、暗闇にうずくまり、彼を見つめた。そしてこの自身のうちに閉じ込めることを、初めて、彼のごく間近なのに彼には届かないのだという意識のあまり淫らに彼女が献身している官能的（sinnlich）な触れ合いのように驚き感じた」（209）。自己感を確かにすること、内在への沈潜は、一見、合一とは逆方向へ乖離していくようである。とりわけ知覚における感覚などは、他者とは通じ合えない、ごく私的で、主観的なものであるように思われる。そこで感覚について考察してみたい。

4. 相互内属的な合一

意識の志向性が最低限しか働かず、意識が触発によって働きかけられる以前には、自我はまだ過去把持を持たないし、それゆえ過去把持をとりまとめる自我の中心化が機能していない。したがって、この先意味の次元では、自我は成立していない、もしくはまだ際立って意識を触発するには至らないが類似と対照がなしている綾の陰影の度合いに応じた自我的ものの曖昧なまとまりが贈与されると考えられる。つまりすでに構成された自我においては、意識の志向性が時間意識の諸相をとりまとめ、対象に意味を付与していたが、この先意味の次元では世界の方から自我が贈与されてくるという逆ベクトル的な関係が考えられるのである。また自我が確立し

ていないのだから、ここでの先意味的な対象の萌芽と自我、自と他はまだはっきりと分離していない。つまり対象化するものと対象化されるもの、見るものと見られるもの、触れるものと触れられるもの、感じるものと感じられるものが未分化なのである。対立し合うはずの両項が可逆的であるとき、それより一次元深いところで同一性が見出される。両項の共通の根としての見ることができるもの、触れることができるもの、感じるすることができるものが見出されるのである。

メルロ＝ポンティが「間身体性（*Zwischenleiblichkeit*）」と言うとき、「この間が意味しているのは、ある A とある B があり、その両者の間に中間の空間があるということではない。というのも間は A と B の間にあるものではなく、この間は、まずもって A と B を差異化することへ導く領域を特徴づけているからである」⁵¹⁾。例えば、眼差し（*Blick*）はまだ何かを知覚する以前に、すなわち視野に分節がなされ、見るものが目に、見られるものが対象に分かれる以前に、まずその何かに向かわなければならない。聞くことは、はじめは聞こえる中身がはっきりせず、何が聞こえるかわからず、音の音源もわからない。まずそこに向けて聞き入るのでなければならぬ。声を聞くことも同様に、声はまずもって誰かの声なのではなく、その声のなかで誰かが出会われるのである。自分に聞こえる声と他者が聞いている自分の声は異なるし、反響では自分に固有のものだと思われた声でさえずれて聞こえることがある。人は声を自由にできる主人ではないのである。「声や眼差しは差し当たり、それらが他者に属するのか私自身に属するのかということを、まだまったく決めることができない、見るという、聞くという出来事である」⁵²⁾。世界は知覚のなかで出会われるが、知覚の世界は感覚の段階ですでに私の私的な世界ではない。

そしてこの間の領域では、自他が未分化の状態、すなわち自我と異他なるもの、身体と事物、自己の身体と他者の身体が未分化の状態であるから、自我の「ここ」と他者や事物の「そこ」という距離も開けていない。した

51) Bernhard Waldenfels: *Das leibliche Selbst – Vorlesungen zur Phänomenologie des Leibes*. Hg. Regula Giuliani, Frankfurt am Main: Suhrkamp 2000. S. 286.

52) Ibid., S. 379.

がって感じるができるものは、至近距離で立ち現れているのである。しかもそこには、自身と分化された事物も他者の身体もまだないのだから、すべてが原身体的であるというある種のアニミズム的な事態である。

しかし、このような間の領域は感じるものと感じられるものがその根において同一であることを示すと同時に、つねにある厚みないしは最小限の差異としてのずれを含んでいなければならない。というのも、それが完全な同一性であったならば、後に主体として分離されてくるはずのものは、「現象するもの」とまったく距離がとれずに同化してしまい、自己意識はいつまでも生じないことになるからである。点的で純粋な「今」が不可能であり、変化や運動がまずなければなかったように、間の領域は同一性であると同時にある何らかの動き含むのでなくてはならない。そして最小限の動きには、最小限の際立ちとしての差異が必然的に生じるのである。⁵³⁾ その最小限の差異は、感じるものと感じられるものが、感じるができるものにおいて、同根で未分化であるにもかかわらず完全に重なり合うこともないということであり、それによって感じるができるものが、至近距離ではあっても与えられうるのである。

この最初の開けから、自己の身体も、対象の意味を発生させるゲシュタルト形成的な類似と対照の綾も可能となるだろう。知覚することなしに、もしくは感覚することなしに世界は開けてこないということは、必ず身体（やがて身体として分離されてくるもの）が居合わせているということであるが、身体は「応答性（Responsivität）」⁵⁴⁾ によって感覚する。応答性とは眼差しや聞くことがそうであったように、特定の対象を目指すことなく、まずは不特定の漠然とした何かに向けてということである。それは要求に応える（respondieren）ことであるが、欠けている情報や知識を埋めるための答える（antworten）ではない。「行動の『答えるということ』」に先行する何かに向けて（worauf）」⁵⁵⁾ ということである。身体が応答性を

53) Vgl. *ibid.*, S. 286. 「間の領域は差異化の領域として特徴づけられるのが最も良いかもしれない」

54) *Ibid.*, S. 365.

55) *Ibid.*, S. 368.

もつということは、刺激と作用の一对一对応関係のようなことではなく、ゲシュタルト的な類似と対照の綾が際立ち、身体を触発する感覚となるという場面でどのような感覚が身体に誘い掛けるかは、一義的でないゲシュタルトの促しという要求によるということである。しかし感覚した身体はそれに応じた作用によって、あるいは身体自身が物体でもあるため感覚すること自体によっても、再度世界に何らかの変化を及ぼし、新たな促しに関わる。このような促しの性格は、有機的な世界とのやりとりから生まれるのであり、促しと応答は「疑似会話」⁵⁶⁾的な性格をもっている。したがって、能動的な意識作用が働かない先意味の次元では、対象の萌芽段階としての類似と対照の綾はまるきり外的に、いわば自動的に生成されてくるのではなく、やがて身体として分離されてくるものとの協働において生成されると考えられる。

だが、自己の身体と他者の身体という区別も成立していない、最小限の差異を含む癒合状態では、自己の身体は規定をもっていない。構成的な順序として初めて身体の先意味的なものが発生してくるのは、他者となるものの身体の方が先であるが、これは鏡像段階論と同じ理由である。したがって先意味の次元では、他者のものとなる身体から自己の身体への先意味的なものの浸透が生じていることになるのだから、この要求と応答のやりとりには自然だけではなく他者も参与する。「動物の若い個体は、その部分肢の使い方（機能のさせ方）を、親のそれを模倣することで習得する」⁵⁷⁾が、フッサールは、他者の身体肢と対になることによって身体肢がその意味と機能を受け取ることを「対化（*Paarung*）」と呼んでいた。⁵⁸⁾ 若い鳥は親の羽ばたきを模倣するし、人間の場合、発声方法の習得による言語音声の獲得では、（視覚的にも聴覚的にも）他者からの働きかけとその模倣が重要な契機になっていることは顕著である。したがって感覚器官でもある身体の機能のさせ方が他者の身体のそれから浸透してくるとすれば、感覚や、どのようなゲシュタルトが形成されやすくなるかというレベルにおい

56) Ibid., S. 375.

57) 斎藤慶典、同上、184 頁。

58) Vgl. Edmund Husserl: *CM*, S. 142.

て、すでに他者が介入していることになる。「超越論的もしくは経験的な自我に係留していると思込まれていた知覚においていつもすでに、間身性体性がその座を占めていた」⁵⁹⁾のである。そして当然、この関係は相互的である。

言語が意味をもつものであり、その萌芽段階である感覚（Sinn）の生成過程がすでに他者と共同であるならば、私が言語のなかで考える限り、私の思考は他者に貫かれており、私は他者から思考を借りているとも言える。また、意味がその成り立ちからして、要求や促しに対する応答であるので、言語も応答的な性格をもつ。したがって応答のなかで思考が生まれ、応答がまた要求になるのであるから、「対話の経験においては、他人と私との間に共通の場が構成され、私の思惟と彼の思惟とはただ一つの織地をなす。私の言葉と相手方の言葉は、議論の状態によって喚起され、われわれのいずれ一人が創造したわけでもないある共通の作用のなかにさしはさまれる。[…] われわれは同じ一つの世界を通じて共存するのである」⁶⁰⁾。

主観性を突き詰めて、最も主観に内在的であると思われた感覚を追究していくと、絶対的な主観というものはどこまでも視野の背後に退き、逆にその深奥で他者と出会うことになったのである。こうして感じるものと感じられるもの、自と他がその根を同じくし、相互内属していることが示された。そしてヴェロニカはヨハネスの死を確信し、自己の感覚に沈潜することで、合一が成就する。

しかし時折物たちはまたもヴェロニカの中にあるようだった。もしくは物たちが、ガラス板のようにヴェロニカとその空間の間にある空間から、目でもってそうするごとく、彼女を見ていた。そして物たちはそこに立ち、あたかも自身に行きつくために、長年ただこの夜を待っていたかのように穹窿をつくり上方に撓み、やむことなくこの過度なものは物たちから流れ出て、瞬間の感じがヴェロニカのまわりで持ち

59) Georg Christoph Tholen: *ibid.*, S. 63.

60) メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』（中島盛夫訳）法政大学出版局、1982、579 - 580 頁。

上がり窪み、まるで彼女自身が突然、黙しながら火をゆらめかせる蠟燭とともにある空間のように、すべてを囲んで立っているかのようだった。(214)

感覚の深奥まで降りて行ったヴェロニカは、自己と異他なる物たちと交感する。だがこの合一は単にすべてと同化するようなものではなく、自己が自己でもあり、異他なるものでもあるという「分かれてもなく、一致するのでもないもの」の関係において捉えられる。それゆえ、物たちもヴェロニカの中にあり、またそれら自身のもとにもある。また、合一においては、境界が解かれる。ヴェロニカは自身の肌を限界とする個体ではなく、すべてのものを囲む空間になるのだが、この開放は現実的な事実性のもとで感じられた自己との不一致ないしは分裂ではない。「ヴェロニカの眼差しは思わず壁に鏡が掛かっている場所を探したが、彼女の像は見つからなかった」(218)。彼女は、もはや自身を対外的な表象として対象化せず、対象化される経験的自我を乗り越えている。

ヴェロニカと空虚な空間の間にあるさらなる空間は、もはや通常の空間ではない。それは、いわばヴェロニカと距離をもたないゼロ距離に開かれる空間である。そこではあらゆるものが相互浸透する。ヴェロニカにとってのヨハネスの表象もその空間にいとされるのだが、ヨハネスの自殺が不問にされるほど現実のヨハネスから離れたとき、ふたりを隔てていた最後の境界までもが開かれ、「彼女は肉感的な柔らかさと途方もない近さを感じた。[...] まるで彼女が彼の目から彼女自身を眺め、どの接触においても彼を感じるだけではなく、言い表しがたくも彼女についての彼の感じをも感じているようだった」(220) のである。このときヴェロニカはヨハネスを外から対象化するのではなく、彼に浸透して内側から感じ、その感覚はふたりのうちどちらかに属するとは言えない。

そしてこのゼロ距離の空間は、ヨハネスが神と呼んで言い表そうとしたものだとされ、続いて獣もこの空間と同様だとされる。獣は「目に入った水が大きな模様へと溶け失ってしまうほど近く滑り去り、だがまた外にあるものとして自身の前にそれを見るなら小さくて遠い」(216)。通常の状態では獣はちょうど良い距離で付き合えないものであり、獣との関係は開

かれる空間のないただの接触か、距離がないのだから無であるかのどちらかである。それは時間においては、点的な瞬間がただの流れ去りとして何もでもないのとアナロジーである。獣はヴェロニカにとっておぞましいものであるのだが、しかし、この空間に比された獣は同時に「眠っている男のように、果てしなく、そして優しい森」(216)であるという、合一の予感として表象された自然の側面をもっている。点的な絶え間ない流れ去りという混沌であった獣は、合一の次元において同時に、すべてが共存する調和を、「あるものからその反対への恒常的な移行」を達成しており、「対立するものどうしが移行の連続のなかに解消され」ている。

自と他が未分化であり、相互内属しているのであれば、当然、この相互浸透は物たちとヴェロニカ、すべての間で生じている。したがって合一は、ヴェロニカとヨハネスの二人だけのものではなく、ある種のアニミズム的な全体性において成就している。そこでは感情や夢、記憶もただの私的なものではない。「夢は一人のうちのものではなく、[…] 全体的な感じのどこかでその居場所を穹窿となす」(215) のである。

ヴェロニカは忘れられたあの記憶を長年求めてきたが、それに近づくたびに獣が立ちはだかり、思い出せずにいた。「きらきらと彼女のなかでただ一つ横たわるこの突然の記憶は、自分自身のうちから掴むことができるものではまったくなく、[…] よそよそしい物体のように彼女から抜け落ちなければならないということによってのみ何ものかなのである」(210)。「思い出し (Erinnerung)」とは、求めているものが何であるのかわからないにもかかわらず、それがあことはわかる何かがある不在において訴えかけてくる、促してくるといった事態であり、対象として捉える前に、まずは漠然とした何かに向かって応答しなければならないのである。これは、自分が何を言いたいかわからなかったが、話すことによって、徐々に考えがまとまってくる語りないしは会話と同様の事態である。記憶は他者との応答のなかで蘇るものであり、その根は他者との共同のうちにあるのである。したがって、他者との共存、合一の状態においてはすべての記憶が蘇っている。ここでは対象化にある特定の何かを思い出すのではなく、「感じや考えの構造の想起が見えるようになる」(216) のであり、それは現在の「一度に (mit einemal) 知る」(216) ことである。

ここにおいて「思い出された現在 (erinnerte Gegenwart)」と「現在のな
思い出し (gegenwärtige Erinnern)」がキアスム的に重なり合っている。「可
能な現実」と「現実的な可能性」がそうになっているように。「言われな
かった言葉が時折、沈黙のなかにあって、ないように」(218)。「何ものでも
ないが、すべてでもある」(220) ように。「自己への沈潜」が「穹窿をな
す (wölben)」ように。現象学を手掛かりに自と他が相互内属し合うさま
を確認したが、合一が先意味の次元にあるとすれば、『合一』を支配して
いるのは通常の論理ではなく「独特に逆立ちさせられた理性」(179) であ
る。自己同一性を保証する「意味」を追究すると、„Sinn“という語の根源
的な二義性にしがって、その起源は感覚に行き着き、さらに感覚は他者
と共同のうちにあることが示された。そこから、自己の内在への沈潜が逆
説的に他者との合一になりうるという事態も理解される。そのとき「規定
できないもの」は流れ去りとして無や単なる無個性なのではなく、未だ自
己同一的な存在者へ至らないがゆえに、むしろその存在者を可能にする動
きとなりえ、存在者が自己同一性を越えていく臨界点となるのである。

合一の空間は、ゼロ距離であるにもかかわらず、開かれた「広い空間」
(216) である。時間も単純に直線的ではない。「もはや単なる感覚的な印
象にとどまらないが、まだ明確な概念の内容でもない」⁶¹⁾ 意識と時間と意
味の成立以前に、動き出しつつあるそんな趨勢において、合一は時空を内
に折りたたむように開く。相反する諸概念はその同一性によって連続的に
渡られるようになるが、同一における差異によって単なる癒合や同化に収
束することはなく、どこまでも互いに包み込み合おうとする。「この短編
集『『合一』』は発展 (entfalten) するのではない。それは内展 (einfalten)
する」⁶²⁾ のである。

(慶應義塾大学大学院文学研究科独文学専攻後期博士課程)

61) Robert Musil: *ibid.*, S. 715 f.

62) Robert Musil: *ibid.*, S. 190.

Die Innenseite und die Außenseite von *Die Versuchung der stillen Veronika*

Eine Betrachtung zur Genesis der Zeit, des Sinnes und des Bewußtseins in
„Vereinigung“

YOSHINO, Taito

Musils Erzählung *Die Versuchung der stillen Veronika* ist ein Werk, das als die zwei Erzählungen Vereinigungen 1911 mit dem Werk *Die Vollendung der Liebe* zusammen veröffentlicht wurde. In den beiden Erzählungen, indem sich die Hauptfigur (Claudine in *Die Vollendung* und Veronika in *Die Veronika*) jeweils von ihrem Geliebten oder Partner entfernt, vollzieht sich die Vereinigung. Die Vereinigung findet für Veronika durch den Tod ihres Partners Johannes statt. Auf diese Weise ist der Weg zur Vereinigung paradox. Bei diesem Paradox wurde schon darauf hingewiesen, daß Veronika ihre Liebe zur wesentlichen, ja zur Vereinigung sublimiert, indem sie die tatsächliche Beziehung mit dem Partner verlässt. Aber wenn das Tatsächliche von etwas Identifiziertem vollgezogen wird, kann die Frage des Identifizierten für die Vereinigung thematisiert werden.

Dieser Aufsatz betrachtet das Verhältnis des Identifizierten, das bei Musil dem Begriff entspricht, zu Sinn und Empfindung in *Veronika*. Dabei nützt eine Phänomenologie der Betrachtung, weil sie genau behandelt, wie das Identifizierte konstruiert wird. Nachdem phänomenologisch festgestellt werden kann, daß Sinn immer nur in der zeitlichen Dauer möglich ist, bietet die Möglichkeit, „etwas“ oder den Sinn nachzusehen, die Voraussetzung des Identifizierten und der Erfahrung des Bewußtseins. In diesem Sinne existiert ein Jetzt nicht im punktuellen Augenblick, sondern kann immer nur in einer Nachträglichkeit erfasst werden. Meine Überlegungen beginnen mit der Erinnerung an eine Vorstellung von der Natur, die im „plötzlichen“ Augenblick trotz des Vergangenseins gegenwärtig wieder Leben gewinnt, und in der die untereinander gegensätzlichen

Begriffe koexistieren.

Es ist bemerkenswert, daß Musil Begriffe als solche ansieht, die wie Gewohnheiten durch die Erstarrung der Gestaltbildung das unfixierbare reiche „Erlebnis“ vereinfachen. Musil nach ist die schon gebildete Gestalt etwas Reduziertes. Wenn Veronika also die tatsächliche „Erfahrung“ in der Wirklichkeit ablehnt oder scheitert, die Dinge zu erfassen, scheint sie nach dem Erlebnis zu verlangen.

Und die Vorstellung von der Natur ist das Erlebnis und spielt solche wichtige Rolle als die Ahnung für den Zustand der Vereinigung. Aber weil im Erlebnis nichts als die Gestalt fertig gebildet wird und darum kein Sinn sich als etwas Fixierbares verwirklicht, weil zudem insofern Sinn mit Zeit korrelativ ist, scheint der plötzliche Augenblick, der die Dimension der Vereinigung öffnet, keine Zeitlichkeit zu haben. Und die Zeitlichkeit der Vereinigung wird zuerst mit dem „Tier“ verglichen, das „das punktförmige Vergessen“ hat und im bloßen Verfließen kein Identifiziertes haben kann. Also befindet sich die Vereinigung an einem gefährlichen Standort, weil das chaotische Verfließen des punktförmigen Jetzt nichts anders als Nichts ist.

Nun wendet die Betrachtung den Brennpunkt auf den Ausdruck „Decke“. Obwohl Veronika niemals die Dinge und sich selbst deutlich erfassen kann, fühlt sie irgendeine Bewegung wie unter einer Decke. Ich setze die Bewegung, die noch keinen klaren Umriss oder noch keine Auffälligkeit gewinnt und doch nicht Nichts ist, auf die Stufe der Genesis des Sinnes, wo gewissermaßen „Vor-Sinn“ erscheint.

Insofern Bewußtsein mit gegenständlichem Sinn korrelativ ist und der Sinn sich noch nicht verwirklicht hat, individualisiert sich auch das Ich auf der Stufe des Vor-Sinnes noch nicht. Zudem, weil Zeit ohne Zeitbewußtsein unmöglich ist, bedeutet hier die Zeit nur erst eine Art Tendenz, in dem etwas sich zu bewegen beginnt und doch noch nicht klar als sich Bewegendes zu erfassen ist. Das Selbst und das Andere sind auf dieser Stufe voneinander noch nicht getrennt. Daraus zeigt sich, daß die untereinander gegensätzlichen Begriffe eine gemeinsame Wurzel haben. Aber indem diese Gleichheit zugleich eine minimale Verschiedenheit enthält, kann der Leib, der sich später individualisiert, im

Fortgang einer Gestaltbildung der durch Aufforderung und Respondieren organischen Auseinandersetzung, wie in einem Gespräch mit der Welt und den Anderen zusammen, den Sinn generieren. Also ist die Welt der Wahrnehmung schon auf der Stufe der Empfindung nicht meine private Welt. Diese Form, in der alle koexistieren, kann als Ineinander bestimmt werden. Deshalb wird eine Möglichkeit angedeutet, daß in der tiefsten Immanenz ihres Subjekts Veronika wieder den Anderen begegnet, doch nicht nur Johannes. Und diese Form des Ineinander ist die Form der Vereinigung.